
縁結び狂騒曲

barth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縁結び狂騒曲

【Nコード】

N6536E

【作者名】

barth

【あらすじ】

古い縁結びの神の元に久々に訪れる参拝者。果たして神は放課後の告白劇を無事に成功させる事ができるのか？止まらないポケとツッコミの嵐が吹き荒れるおかしな学園物語。

プロローグ

昔、この場所には縁結びの神様を奉る神社があった。

両想いの男女が来れば、生涯添い遂げる。片思いの者が来れば、告白の際に神が助けてくれる。

そう言い伝えのある神社だ。

奉られている神は、幸せなつがいを見るのが好きだった。悲愛を潰すのが好きだった。人と関わるのが好きだった。

結果、多くの人々が神社を訪れ、多くのつがいが生まれた。

だが、得てして人は変わるものである。

近代化の名の元に、人々はいつしか神社の事をゆっくりと、だが確実に忘れていった。

今、神社のあった場所には高校が建っている。

神は、校舎の裏にひっそりと建てられた社に追いやられていた。

人は神を忘れ、神社があった事さえも忘れた。

数十年の間、社には誰も訪れなかった。

が、ある日の放課後、社には学生らしき少女の姿。

少女は言った。

「明日の告白が、上手くいきますように……」

彼女としては、社の歴史など知らず、藁にも縋る思いだったただけだが、その願いは、はからずも孤独に眠る神を目覚めさせた。

少女が去った後、不意に、社が虹色に光る。

次の瞬間。

社の前には一人の男が立っていた。

「願い、確かに聞き届けたぜ」

狂騒曲が、始まる……

第一話 神様奮闘 これが前哨戦！？ マジで！？（前半）

「さして、とりあえず情報集めだな」

少女が現れた翌日。

神は登校してくる生徒達の中から少女を見つけ、そっと背中に回り込んだ。

当然ながら彼の姿は一般人には見えない。

彼の目の前で、少女は下駄箱に手紙を入れる。

「ははあん、恋文か？ いや、告白つつつてたから呼び出したらな」

彼はそつと手紙を読む。

『今日ノ放課後、屋上ニ来テ下サイ？ 二年一組 笹野柚子』

「え疑問系！？ それに何故に片言？ いや、まあ、悪いとは言わんが。……どーでもいいけど漢字の二と片仮名の二って区別つかねーな」

困惑しながら神のは手紙を戻した。

「さてと、相手はどんな奴かな」

暫くして、ある男子生徒が手紙の入っている下駄箱を開けた。

「お、こいつか？」

神が呟いた瞬間。

「おお！？ 棗の下駄箱にこんなモノがあ！？」

「違うのかよ！？ つつーか人の下駄箱覗いちゃいけません！！」

驚く神に対し、その男子生徒はなんと

「くそう！ 何故棗ばかり、こんなモノはあ！」

そう言つて手紙を口に入れようとするではないか。

「やつ、ちよつ、させるかああ！！」

瞬間、神の手から桃色の光線が放たれる。

光線が男子生徒に直撃すると、彼はピタリと動きを止め、

「……と思っただけどやめた」

そう言つて手紙を下駄箱に戻しどこぞへと去つていった。

「ふう、あぶね〜」

これこそが、神の力の一端。恋愛の妨げになる事柄を排除する偶然を引き起こす。

例えば、告白してる最中に誰もその場所に近付かないようにしたり、人込みの中でも想い人が一発で見つかったり、街角で出会ったりという事が可能となる。

と、そこへ新たな男子生徒が

「ああっ！？ 棗の下駄箱にこんなモノが！？」

「またかよ！？ どれだけ他人の下駄箱に興味あんだよお前ら！！」
新たな男子生徒へ向けて再び腕を桃色に光らせる神。

「だが！ 不粹な真似はさせん！！ 喰らえ必殺、『恋の桃色偶然』
！！」

「つて、棗は俺か」

「お前かよ！？」

出す瞬間、男子生徒の思わぬ一言に驚き、あさつての方向に飛び出る光線。

「！？？」

そして関係無い生徒に直撃する。

光線の当たつた生徒は、手紙を持つ棗に気付くと、さつと下駄箱の陰に隠れ呟いた。

「棗、頑張るんだ。俺は見守っているぞ！」

小さなガッツポーズをして棗に生暖かい目を送るその生徒を、神がげんなりした様子で見ていた。

「にやろう、あいつのせいで変なキャラが出来ちまつたじゃ」

文句を言いながら棗の方を振り向くと、

「H A H A H A、ニホンゴムズカシネ〜」

「俺がよそ見している間に一体何が！？」

先程と比べ縦にも横にも広い、肌の黒い大男の姿があった。

「あらく、少し見ない間に随分育っちゃって。人種まで変わっち

やったの………って、そんな訳ねえだろがああ!! 誰!? ねえ誰おっさん!？」

突然の相手の変わりっぷりに完全に狼狽する神の前で、変わり果てた棗(?) に別の生徒から声が掛けられる。

「お、タマ。また分かんない日本語でもあったのか?」

「タマ!? このおっさん名前タマ!? ペットじゃないんだからまさか!？」

「ノー! タマノー!!」

神の前でタマと呼ばれた大男が悲痛そうに否定する。

「まあ、そうだな。どう鼻^{たまはな}肩^{はら}目^めに見てもタマなんて柄^{がら}じゃな

「マイネームイズ珠^{たまはら}八^{はち}郎^{ろう}介^{けい}定^{てい}!!」

「なんかもつと凄^{すご}いの出^でて来^きた!? え日本人!？」

「アーンド、ブラック!!」

「……ん? アンド、ブラック? ……ブラック? え、まさか…

…珠八郎介定ブラック!? カッコイイなオイ!!」

想像以上に思わぬ事態にツツコミを入れ、そこまでして神はある事に気付く。

「………って、棗^{たまはら}じゃないじゃん!? あいつは!? あいつは何処^{どこ}行^いった!？」

いつの間にか棗と入れ代わった珠八郎介定ブラックから視線を外し、辺りを見回す神だが、突然ながら目的の人物は見つからない。

仕方なく神は下駄箱を離れ、校舎を捜し始めた。

一方、棗はと言つと。

「………ドキドキ」

今まさに校舎裏で、手紙を開こうとしていた。

「えっと、ナニナニ?」

緊張の面持ちで手紙を開く棗。

「?イサ下テ来ニ上屋、後課放ノ日今………?? ?から始まる文章
つて………? 暗号?」

きょとんとした顔で手紙を見つめる棗。

それも当然と言えた。普通、悪戯にしる何にしる、少なくとも何らかの意味ある文章を載せるものだろう。

予想外の意味不明文に、棗は頭を捻る。

「むづうん、斜め読みは無理だし、飛ばして読んでも意味分かんね……やっぱ悪戯かなあ？」

唸る棗が、何気なく視線を視線を下げると、まだ下に文字がある事に気付く。

「子柚野笹 組一年二……ああっ!？」

文字を読み、素っ頓狂な声を上げる棗は、再び上の文章に目を向けた。先程とな違いと言えば、文字の読み方。左読みから、右読みへ。

どうやら学年の部分でピンと来たようだ。

「なんで右読み!？」

書き方に意を唱えつつ、今度こそ手紙の内容を正確に把握した棗。途端に、何故か震えだす。

「嘘……マジ? 笹野さんから?」

呆然とした表情で呟き、ははっと空笑いした棗は空を仰ぎ、

「いよっしゃあああ!」
叫んだ。

「ったよ! マジかよ!? また夢じゃねーだろーな!」

前にこうゆう状況を夢に見た事があるらしい。

棗は自分の頬を抓りながら不気味にえへえへと笑っていた。

ここで、またしても棗の表情が変わった。というより、止まった。

「あ……」

固まった表情のまま唸るように呟くと同時に、棗は頭を両手で抱えながら悲痛な表情になる。

「やつべーよ……忘れてた……うああまじい」

ぶつぶつと呟き、次の瞬間。空に向け、叫んだ。

「神様仏様!!! 今回ばかりはあの忌ま忌ましい癖が出ませんように!!! どうかつ!!!」

誰に向けるでもない悲痛な言葉は虚空へと消え、少し視線を下げた棗の目に何かが映る。

言わずもがな、あの神の社だ。

「ん？ 社？ いや、この際なんでも良い!!」

言つが早いか、社に向けて棗のダイビング土下座が炸裂する。

「どうか笹野さんとうまくいきますように!! なんまいだなんまいだあにやにやうんはんたらぬよ」

呪文だか念仏なんだかよく分からない言葉を棗が発する。

と、そんな棗を苦笑しながら見つめる一対の瞳。

「へえ、誰かが祈ってる心配がしたから戻ってみれば、まさか棗の方も祈ってくるなんてなあ。こりゃ運命かな。……いや、その前にこいつなんでこんなに焦ってた？ ふむ、ちーっと気になるな」
怪訝そうに神が棗を見る。

対して棗はと言うと、未だ社に向かい祈りを捧げている最中だった。

「神様……ん？ そいや何の神様？」

不意に思い付いたような表情になると、棗が考え込む様子を見せる。

「むっ、戦い？」

「戦神に恋愛祈るのかよ……せめて確信なくとも恋愛って考えるもんだろ普通……」

聞こえていないと判りつつ、棗にツツコミを入れる神。

「いや、もしかして安産？」

「お、ちよい近付いた」

「まさか、もしかして……」

「ふふん、やっと恋愛だと気が」

「アニメ!？」

「うおい!!」

「まさかとは思ってたけどアニメの神を奉っているのか!？」

「ねえよ! それはねえよ!! お前はアニメが何百年前からある

「と思つてんだ！！　つーかお前は何に恋愛成就を祈る気だ！？」

「アニメの神よ！！　今こそ俺にラブコメ的恋の力を！！」

「祈っちゃった！？　祈るなよ！！　アニメに恋愛祈るなよ！！」

「つーか俺アニメの神決定！？」

ありえない棗の思い込みで神がツッコミを連発していると、再び棗が何か思い付いたように叫び出す。

「いや、もしかしてエロゲの神！？」

「お前の頭は何がどうなつてんだよ！！　蛆でも湧いてんのか！！」

「ああ！！」

「それとも乃神のがみ！？」

「誰だよ！？」

「まさか剛つよしが奉つてあるなんて……」

「いやちげえよ！！　何が悲しくてお前は知り合いに恋愛成就を祈つてんだ！！　んなあ、もう！！」

社の前にひざまづき、友人と思われる人物に向け祈りを捧げる棗の後ろに、何かが輪郭をつくる。

光か何かで作られたように見える輪郭は、徐々に立体を、色を得て、ついに場に人型を映し出した。

実体を持つて現れた神は、気付かず喚く棗に近付き、

「誰がアニメか、エロゲか、剛かあボケえ！！」

「あでぶ！？」

勢いよく殴り倒した。

「つてえ〜、誰だよ！！」

地面にめり込んだ頭を起こし、勢いよく振り返る棗は、同じく勢いよく振り下ろされた神の足に潰された。

「ぶぎゅ！！」

「全く、お前の頭はあれか？　カスでも詰まってるのか？　それとも何にも入ってないのか？　あ？」

声にドスを効かせながら、神がぐうりぐうりと棗を地面に押し込む。

「ちよっ!? 痛っ!? 痛いつて!? 止めるよ!」

「………」
「痛い埋まる!! 止め、おい、止めろつて!!」

「………」
「すみません止めて下さい!! すみませんごめんなさい止めてえええ!!」

満足したのか、棗からゆっくりと足を外す神。同時に、棗は驚く程の勢いで土埃をあげて神から離れた。

「何なんだよいきなり。俺、あんたに何かしたか?」

地面に尻餅をついた体勢で、怯えと困惑を含んだ目で神を見上げる棗に対して、見下すような視線を向ける神はぼつりと呟いた。

「……縁結びだ」

「え?」

「だから、縁結びだよ」

「あんた何言つて?」

「だあかあああ、ここは縁結びの神を奉った社だつってんだ!」
ぎんつと眼光鋭く睨む神に、棗は短い悲鳴を上げてまた少し後ずさる。

「な、なんであんたがそんな事」

「神だから」

目の前にいる人物の発言に棗な目が点になる。

「………はい?」

「ま、口で言っても分かるわきゃないわな」

「一見優雅ともとれる仕草で言つと、神はゆっくりと、浮いた。」
「うわっ!」

驚く棗を尻目に、二メートル程浮かび上がると、今度は全身に虹色の光を纏う。

「わっわっ!?!」

「これで、とりあえず俺が普通じゃないってのは分かったか?」

勝ち誇るように言う神に、棗はガクガクと何度も頷いた。

第一話 神様奮闘 これが前哨戦!？ マジで!？ (前半) (後書き)

遂に本編突入です。はてさてこれからどうなりますやら。

第二話 神様円舞 これが前哨戦！？ マジで！？（後半）（前書き）

うちのキャラの皆さんは大体がポケもツツコミもこなします。

第二話 神様円舞 これが前哨戦！？ マジで！？（後半）

目に見えて驚きを表す棗に、神は浮いたまま尋ねた。

「で？ なんであんなに焦ってたんだよ？」

「……………」

なんの事かと棗の口から漏れる間抜け声。

「好きな女から良い手紙貰ったんだろ？」

「な、なんで知って」

「だーから言つたる？ 俺は縁結びの神だつて。ま、本当言つとな、昨日来たんだよ。女の方も。よかつたじゃねーか、両想い」

うんうんと腕を組んで笑う神。

対して棗のほうは、俯いていて表情がよく分からない。

「……………」

突然、ぼそりと棗から声が漏れた。

不意に漏れた否定の言葉を聞いて、神の笑顔が消える。

「だらうな」

「え？」

先程の雰囲気から一転した神の態度に、棗が少し驚いたような視線を向けた。

「もし何もなければ、あんなに取り乱しも、神頼みもするわけない。

……………話してみる。何がそんなにまずいんだ？」

目の前にいる人物が本人の言う通り神だとは考え難い、だが、不思議な力があるのは確かで、自分に協力してくれそうだと考えた棗は、ぼつぼつと話出した。

「……………あんたはさ、大事な場面とかで、言っちゃ駄目な事って、思い付くか？」

「ん？ それって、あれか？ 車に轢かれそうになつてる奴に嘲笑いながら動くなーって言って足に杭打ち込んだり、溺れてる奴に対して沈めーって言って水に電気流したり、恐喝現場に居合わせた際

に脅されてる奴にクズって言って見捨てたりとかか？」

「……あんた、どこまで鬼畜だよ。つつーか言葉だつてんのになんか余計な行動付いてるし」

想像を超える非道ぶりに呆れて呟く棗に、平然と神は返事を返した。

「まだ六分目ぐらいだぞ」

「……ま、まあ、いいや」

目の前の人物に対して背筋がぞくりと冷えた気がした棗だったが、出来るだけ考えないようにして話を続ける。

「俺はさ、なんてゆーか、そーゆー場面になると言っちゃいけない事……つつーか邪念からでた言葉みたいなのが、言おうとしてる言葉と混ざっちゃうんだよ」

「ん〜？ なんだそりゃ？」

うまく意味を掴みかねている神が眉を寄せる。

「実際俺だつてよくわかんねーんだ。ただ、これのお陰で大事な時は失言ばっかだし、どーにもなんないんだよ」

棗は困ると言うよりも、諦めにも似た雰囲気話した。

「あ、成る程。つまり大事な時に失言する体質な訳ね」

最後の台詞でピンときたらしく、わざとらしく手を叩いて神が納得する。

「う……まあ、簡単に言えばそ」

「ヘタレ」

「ぐっ！ そんなはつきり言」

「ヘタレ」

「うぐふっ！ いやだから」

「ハテロ」

「なんか違う！？ まだ果てたくない！！」

「ハテレみみゆむにゆらりら」

「もはや意味不明！？ 噛んじゃったの！？」

「……………むう」

ふいつと気恥ずかしそうに神がそっぽを向いた。

「図星！？　ってか頬赤っ！！」

「ま、冗談はこの位にしとくか」

どこまでが本気なのか、それとも全て冗談なのか、先程までの表情を一変して真面目な顔をした神は何かを解説する口調で話し出した。

「ようするに、だ。お前は手紙くれた笹野が好き。でも厄介な事にお前の口はこういう時、クソゴミムシ的発言しか出してくれない。何とかして上手い具合に行かないかなあって感じて神頼み。何か付け加える事はあるか？」

「え？　いや、無い、です。はい」

コロコロと態度を変える神についていけず、キョトンとした表情でつつかえながら棗が答えた。

「よし、お前の問題は分かった。任せな」

出たのは、あまりにも軽い言葉。

「え、何とか出来るのか？　どうやって？」

今まで散々悩まされた悪癖があっさり治ると言われては誰でも実感は沸かないだろう。棗の顔には明らかな疑問が浮かんでいた。

「言っても分かんねーよ」

「でも……」

不満気と言う棗に神が面倒そうな顔をして、ため息を吐きながら話し出す。

「はあ、まずお前の脳に外的要因による間接的接触を行い精神と呼ばれる概念的物質を具象化するその為には一度お前の意思を司る高次元要因所謂魂を同調投影する必要があるんだがこれはお前の存在する座標上にある高次元に空間湾曲で干渉する事で可能そして魂から精神この場合魂は自我を指し精神は心構えを指しているんだがそこから精神を具象化するには」

「いや、すみません。わかりません」

「だから、言っただけが、分かんねーって」

呆れたように言い捨てる神に、棗は気まずそうに言葉に詰まる。
「ま、つまりお前にや分かんない深〜い所で大丈夫って事だ。そんな時になりや分かるさ。お前は放課後までどんな劇的な言葉で告白受けるかでも考えてる」

最後に棗の頭にポンと手を置くと、神は空気に溶けるように消えた。

「えっ？ ちょ」

「あ〜そうそう」

あっさりと話を打ち切って消えてしまった神に対してうるたえる棗に、何処からともなく声が響く。

「三……二……一」

「??？」

カウントダウンが零になった瞬間。辺りに響いたのは、朝のホルムルーム開始の鐘。

「うわっ遅刻!？」

「あっはっは、さらばだー」

青空の元で反響する声を尻目に、棗は教室に駆けて行った。

さて、そんな棗の後ろから、姿を消した神が付いて行ったのは、言わずもがなと言う事だろう。

既に誰でさえも聞き取る事の出来なくなった声で、神が呟いた。

「さて、後は二人が無事に放課後を過ごせるようにするだけだな。ま、特に問題無かる」

数時間後、その言葉が大きな間違いだと思鳴を上げる事になろうとは、まだこの時は知るよしも無い事だった。

太陽が頂点をやや過ぎた頃、神は既に悲鳴を上げる所か、ぐったりと疲れきった表情で俯いている。

「なんでこんな……あいつ厄日なのか？ っつか俺が厄日？ はあ、畜生」

がりがりと神が片方の手で頭をかく。

何故こうなったのか、とは神自身考えていた。

無理もない。今日に限って、面白いように棗と柚子の放課後を漬さんとする事柄が多過ぎるのだ。他部活の助っ人、教師からの部屋掃除依頼、急な部活集会、等々

「はあ、放課後の用事多過ぎ、つたく」

二人が放課後を漬されそうになる度にフォローしてきた神が愚痴る目の前では、昼飯の弁当を談笑しながら食べる棗の姿。

「あ、そいや棗」

「もぐもぐ……ん？」

かつかつと白米を掻き込み咀嚼する棗に、正面に陣取っていた男子生徒が話し掛けた。

「今日の放課後空いてるか？」

「え、いや今日は」

「よし暇だな！」

「だから」

「今日佐多高の子達と遊ぼうって話だったんだけど人数足んなくてさー」

「ちょ」

「いやー棗来るんなら多分あの子達喜ぶよ。お前顔良いしさー」

あまりに一方的な会話に、神がもう何度目かになる悲鳴を上げた。

「ぬああ、もうっ！ お前はどーしてもっとズバツと言わないんだ

この馬鹿！！ ってかお前も人の話ちゃんと聞いてやれよ！！」

どうにも意思を貫く事が難儀らしい棗に嘆き、神が放ったのは、相も変わらず桃色に光る光線。

一直線に走るそれは、嬉しそうに頷く男子生徒に直撃する。

途端に、その生徒は顎に手を当てて考えだした。

「……と、思ったけど、何かこっちの持ち札勢揃いっつーのも癪だよなあ。あの程度の奴らに。まだあっち叩けば一人か二人位良いのが出そうだし。ん〜、やっぱお前は今回パスな、わりい、こっちら誘っついてや」

「あ、いや、それは良いんだけど。お前、調子良さそうな雰囲気し

てんのに、突然黒い事言うよね……」

「ふふん。紳士の嗜みさ」

「やな紳士だな」

ポーズを付けて話す男子生徒に、棗が呆れた声を出す。

「なはは、駆け引きぐらい出来ないかね。んじゃ、俺別メンバーに声掛けてくつから」

食べ終えた弁当を抱え、その生徒は席から立つ。

「ふう、全く、やれやれだ」

神が腰に手を当ててぼやく。と、なんの気無しに耳にその男子生徒の声が入ってきた。

「おい、すけブラ。今日暇だよな？」

「透けブラ!? 何故そんなあだ名に甘んじているのそいつは!?!?」
悲し過ぎるあだ名に、つい振り返ってしまう神。その目に映ったのは、

「H A H A H A、ヤマトナデシコ」

朗らかに笑う、珠八郎介定ブラックの姿。

「ぎゃああああ目がああああ!?!?!?」

目の前に居る筋肉コワモテ大男のブラジャー姿を想像してしまい、瞬時に目を覆って神がのけ反った。

「何故だ!? 何故だ珠八郎介定ブラック!! お前にそれはもはや殺戮兵器だぞ!?!?」

叫びつつ、神はある事に気が付く。

「ん? つつか、朝見た時はそんなもん見えなかったよな……」

未だ混乱収まらぬ頭でそんな事を考えていると、後ろで棗の声が聞こえて来た。

「なあ、毎回思うんだけどさ、何ですけブラ? 普通にただでいいじゃん」

どうやら、すけブラと言うのは唯のあだ名らしい。

誤認だと理解した神は自らの行為を恥じ、うがーっと叫びツッコんだ。

「あだ名かい！ つーかたけだも普通じゃねーよ！ どんな略の仕方だよ！！」

神の言葉は当然ながら本人達には届いていない為、棗と男子生徒は何事もなく会話を続ける。

「ただだって既に別人じゃん。誰かと被るかも知んねーし、その点すけブラなら被る心配ないだろ？」

「被る心配は無いが悲し過ぎるだろ！？ イジメの良いターゲットじゃ……いや、あの図体でそりやないか？ いやとにかく哀れだ！！」

聞こえていないと解りつつもツツコまずにはいられない神。

「じゃあ、珠八郎介定ブツ」

「えー、長い」

「そうじゃない、そうじゃないだろ！！ 何だよブツって！？ 名前が面白くて噴き出しちゃったみたいだろーが！！」

「H A H A H A、珠八郎介定ブツ H A H A H A H A H A」

「しつかりしろ本人！？ 自分のあだ名にウケてどうする！！ 違

うだろ、もっと気にしなきゃいけない事があるだろ！？」

「しゃーない、じゃあ間を取ってすけブラッでどーよ？」

「変わってねえええ！！」

「そだな」

「良いのかよ！？ お前の意見九割方無視されてるぞ棗！！ っつ

ーかまず本人の意見を聞こうぜ！？」

「H A H A H A、すけブラッヒヤッホウ！」

「お前は一体どうしたんだよ！？ そんなにテンション上がる程気に入ったのか！？ タマは否定した癖にすけブラッは良いってのか！？」

結局珠八郎介定ブラックのあだ名はすけブラッでまとまったらしい。

男子生徒と珠八郎介定ブラックはそのまま放課後の予定を話し出し、棗は呑気に昼寝を始めた。

唯一人、神だけは納得いかなさそうに懨然としていたが、気付く者が居ない今の状況では何事も起こる筈も無い。

以降は特に問題も無く、概ね平和に昼休みは終了した。

放課後まで、残り二限。

第二話 神様円舞 これが前哨戦！？ マジで！？（後半）（後書き）

放課後までもうちょっとかかりそうです。どうか緩い目で御堪能下さいませ。

第三話 神様驚愕 なんだよこいつら!?(前書き)

今回はちびつとばかり栗君のテイストが違つのです。

第三話 神様驚愕 なんだよこいつら!?

昼休みも終わり、授業開始の鐘が響く。

鐘の音と共に教室に入って来たのは、濃紺のスーツに身を包んだ女性。

「……なんか、教師にあるまじき艶があるんだが」

思わず神の口から言葉が漏れる程、その教師には色気が漂っていた。

生徒達も同意見のよう多数の男子、稀に女子が目元を緩ませている。

明らかに授業とは異質な視線を纏いつつ、女教師は余裕溢れる口調で授業を開始した。

「さて、今日は十六頁からだったわね？ じゃあ……ん、そうですね」

指を顎に当てて考える女教師。選ばれた者にしかする事を許されないこの恰好に、神は彼女に注がれる視線が濃さを増した気がしたが、本人は特に気にしていないらしく、時計を見ながらのほほんとした艶たつぷりに話し出す。

「今日は二十日だから、東雲くんね」

言った瞬間。何故か教室が少しざわめく。

「ん、なんだ？」

唯一人、神だけが理由が解らず不思議そうな声を上げた。

ざわめきの答えは、東雲と呼ばれた生徒の言葉によって明らかにされた。

「泉先生、俺出席番号十一番ですけど……？」

東雲の言葉に、神が意外そうな声を上げた。

「あれ、棗じゃん。ふーん、棗の苗字は東雲っつーのか。ま、いいや」

思わぬ所で棗の苗字が分かったが、さして興味も無いように流す。

「ん〜……だから？」

棗の疑問に泉は少し唸り、何故か疑問で返した。

想定外の返答に棗がうるたえる。

「いや、だからって……普通二十番に当てませんか？」

「まあ、細かい事は良いじゃない。ねえ？」

棗に向けられて投げられたのは、余りにも甘い、甘い呼び掛け。

瞬間。

「……イエス、マム！！」「！！」

泉の信奉者達の叫びが、全員一致のタイミングで繰り出された。

「いや、あんたらよくても俺よくねーし。てかお前等どこの軍隊だよ」

呆れたように棗が切り捨てる。

無論、こんな行動をする相手がそんな一言に納得するような普通の神経をしている筈がない。当然の如く棗に食って掛かった。

「貴様！ 泉様に異を唱えるつもりか！！」

「つもりじゃなくて唱えてんだよ馬鹿、考えて物言え馬鹿、つか黙れ馬鹿」

威勢良く息巻く信奉者に、引く所か畳み掛ける棗。

「おおつ、自分の意思を貫けない筈の棗がこんなにバツサリ言うなんて！」

今までの認識を覆された神が感嘆混じりに言う。

神が物珍し気に眺める中、別の信奉者達が棗に噛み付く。

「お前、何が気に入らないんだ！ 泉様に当てる頂いた癖に！」

「そつだ、本来なら喜びの咆哮を上げてもおかしくないだぞ！！」

「黙れ変態共。明らかに関連ないだろ二十と十一。小学生からやり直せ低脳。こちとら当てるくれなんて頼んじやいねんだよ腐れ頭。」

お前、吠えたいんなら明日から犬小屋に住め駄犬」

「東雲君口悪いわよ。それに女性は大事にしなさいよ。心が狭い人って最低」

「大事にするってのは自分殺して我慢することじゃないだろ？ そ

れは墮落を容認するだけじゃん。それに俺、変態は反吐が出る程嫌い」

「お前！ 泉様が変態だとでも」

「変態はお前だ脳無し。いや、お前に脳なんて勿体ないな空頭。良いから黙れ、お前が喋ると人間の価値が下がるんだよ木偶」

「……テメエ！」「……」

口では勝てないと理解したのか、棗の辛辣な言葉に我を忘れただけなのか、信奉者達がいきり立って一斉に立ち上がった。

だが、不思議な事に、教室は和やかな雰囲気崩さない。

「あらら、随分単純な奴等だな……。……っつーか、この和やかな雰囲気はなんだ？ 私刑なんて日常茶飯事なのか？ んむ、とりあえずこんなトコで怪我なんぞしたら放課後ぶっ潰れるし。準備だけはしとこ」

場の空気に自分なりの分析を加え、神は右腕に桃色の光を集束させる。

「……相変わらず、単純な生物共なまもの。はあ、めんどくさ」

和やか空気の中に、棗の物凄く嫌そうな声が流れた。

明らかな侮蔑の台詞に、信奉者達は呼応するように叫ぶ。

「いつもいつもふざけやがってええええ！！」

まさに一触即発。彼等の心を敵意と侮蔑が支配し、力と言う古よりの優劣判断法に従い、今こそ破壊衝動の奔流に身を委ねようと身構え、

「喧嘩は駄目よ」

「……僕達と東雲君は親友です！！」「……」

一斉に泉に敬礼した。

彼等が棗に飛び掛かろうとした瞬間。泉の呟きが、一瞬で荒々しい空気をぶち破ったのだ。

「へえ、親友なんだ」

楽しそうに泉は頬を緩めると、一番左端にいる信奉者を指差して言った。

「じゃあその心意気を評価して、十六頁から和訳、お願いね」

「うおおお任せ下さい泉様ああああ！！！！」

「こーら、女王様、でしよう?」

あくまでも余裕に、艶たつぷりに宣う泉。

瞬間。

「っ!?! がはっ!?!」

「うおお!?! 真壁、真壁ー!?!!?!」

当てられた信奉者、真壁が鼻血を噴き出して昏倒した。崩れ落ちた真壁を別の信奉者が抱き起こし、声を荒げる。

「しっかりとしろ真壁! まだお前にはやる事が残っている筈だ!?!」

「……………」

しきりに真壁の名を叫ぶが、既に彼は声の届かない所に逝ってしまっただらしい。鼻血を流しながら白目でぐったりとしている。

それはもう輝かんばかりの笑顔で。

「うう、真壁、お前の死は無駄にはしない……女王様!! 真壁の代わりに私を!?!」

真壁を抱き起こしていた信奉者が辺りに唾を撒き散らしながら泉に言った途端、他方からも声が上がった。

「いえ僕を! 女王様!?!」

「私がやります!?!」

「ワタシニオマカセクダサイ!?!」

次々に主張を始めた信奉者達に、泉が悩まし気に声を上げた。

「ううん、そうねえ。じゃあ」

少し考え、ぴっと人差し指を立てる泉は、にやりと笑顔を浮かべて言った。

「東雲くんをお願いしようかな」

「やっぱり俺ですか!?!」

「……何故えええ!?!」

ともすれば悲鳴とも取れる素っ頓狂な声を上げた棗と信奉者達。因みに他生徒は喜劇でも観るような目で諸々の事態を眺めている。

教室内の構図を眺めている神は何やら納得顔で呟いた。

「ははあん。……ふっ、はっはっは。成る程ね。つまり、全てはあの泉って教師の掌の上、か」

苦い表情で和訳する棗を、神は笑いながら眺めていた。

「棗を構えば奴らが食ってかかる。どうやら棗は嫌いなもんに容赦しないタイプみたいだから奴らに臆さない。奴らは泉に絶対服従。はは、あっという間に三流喜劇の完成だ」

何故、当事者達以外があんなに落ち着いていたのかを理解した神は、感心したような、面白いものを見るような笑顔を泉に向ける。

「ったく、とんだ狐も居たもんだ。ま、自分に正直に愉しくやってる奴ってのは、嫌いじゃないけどね」

言って、神は嫌な予感を覚える。びしりと固まった笑顔と流れる汗をそのままに、唐突に脳裏に現れ、あっという間に自分の内を不安で満たした考えを打ち消そうと努める。

「いやいや、そんな事は。ない、うん。腐っても教師だ。授業も今はそれなりにやってるし、まさかそんな事は、なあ？」

誰に向けるでもない問い掛けは発した本人の耳の中だけに響く。

不安を退け、時に唸り、時に祈った神を置いて、授業は着々と進み、そして、終わった。

終業の鐘が響き渡り、生徒の緊張が目に見えて解けていく。

「……………」

音が止み、教科書をしまった泉を見て、神は自分の不安が収まるのを感じ、安堵の息を吸い込むと、

「あ、東雲君。放課後生徒指導室にいらっしやい」

「ブハッ!? ゲホッゲホッ!!」

噴き出し、噎せた。

「……俺、なんかしましたっけ？」

苦々しい様子で棗が問う。

「え、あれだけ授業妨害してそれは無いんじゃない？」

「やっぱりか!? ちょっとでも期待した俺が馬鹿だった!!」

最後の最後に期待を砕かれ踏みにじられた神が吠える。

「いや原因は多大にそちら側に間違い無く確実に僕は巻き込まれた側かと」

「え？ ん、……ねえ？」

棗の質問に対しまたもや疑問系で聞き返す泉。

「いや、俺に聞かれても、……ねえ？」

「えっ！？ いや、俺？ えええ、俺に聞くの？」

いつもならここで棗が戸惑う所のだが、そこは棗も学習したのか、なんと、いつ異を唱えようかと待ち構えていた信奉者に流したではないか。

思わぬ棗の先制攻撃に信奉者内に波紋が広がっていく。

「うん。どうよ？」

「いや、俺巻き込まないで」

「私は、……ん、不可抗力に一票」

「僕は棗が原因に一票」

「私は……私達に一票」

「……え？」

一人の女生徒の発言に、それまで思い思いに好き勝手宣っていた面々が一齐にその女生徒に注目した。

「いや、俺等じゃなくない!？」

「原因じゃあないよね、間違い無く」

「つか僕達は関わったの一番最後だし、ねえ？」

広がる困惑。

揃って否定的な意見を出す彼等に、元となった言葉を発した女生徒は若干興奮気味に、勝ち誇ったように呟いた。

「そう？ じゃあ貴方達はいいわ。原因は私だけって事で、放課後私一人で生徒指導室に行かせてもらうわね。ふふ、女王様と二人つきり」

「……!？」

衝撃。

信奉者達の間を溢れんばかりの動揺と納得が伝播する。

「そ、そうか、もし原因になれば」

「ほ、放課後女王様と……」

「誰も居ない教室で」

「……………ぶはっ!？」

「うおお、真壁!？ 真壁えええ!!」

真壁、再び轟沈。

未だ覚めやらぬ動揺に震える信奉者達を他所に、その女生徒がとどめとばかりに口を開く。

「ま、そうよね。貴方達は原因じゃな」

「…………原因に一票異議無し文句無し!! すいませんでした!

!」「」「」

一斉に意見を翻し、打って変わって女生徒を褒めたたえる信奉者達。

賑やかに賞賛が飛び交うのを生温い目で眺めていた神は、ふと棗と泉がいつの間にか移動した入口付近で奇妙な視線を交わしている事に気が付いた。

「あれ、あいつら……?」

神が訝し気に呟くと、視線を交わしていた二人がふっと笑った。

「相変わらず、弄るのがお上手ね?」

「いい加減、俺を餌にペットを愛でるのは止めてくれませんか?」

「良いじゃない、愉しければ?」

「俺は迷惑です」

間髪入れず返した棗に、泉は声を潜めて囁く。

「今度小テストの大まかな範囲教えちゃうから、さ」

「やれやれ、あんまり派手にならないよう、気、付けて下さいよ」

「当然」

「こ、こいつらグルやああああああ!……!」

神が驚愕の事実絶叫する。

まさか棗と泉が二人して信奉者達を弄っていたなど、誰が考えて

いただろうか。

「な、棗って、こーゆー一面もあったのか……………く、黒え」
笑う黒幕、騒ぐ道化、眺める傍観者。

世界の縮図を見ているようだ、神は呆然と三つの陣営を目に映した。

時間と共に、各陣営は静寂を取り戻し、いつもの雰囲気を取り戻す。

今や、当然のように普段通り。

「なんか、出番なかったのは良かったが……………びみょうな気分」
疲れ切った空気を纏い、神はため息を吐く。

放課後まで、残り一限。

第三話 神様驚愕 なんだよこいつら!?(後書き)

はい、黒栗君でした。次回からはまたノーマル栗君ですよ……多分ですけど(笑)

第四話 神様敗北 もういやこんなの!?(前書き)

随分間があいてしまいました。その分楽しんで頂けるよう努力した次第でございます。

第四話 神様敗北 もういやこんなの!?

終業の騒動から数分。既に本日最後の授業が始まっていた。先程とは打って変わって、この授業風景は平穩そのもの。

「うん。こりゃ今回は何事もなさそうだな」

真面目にノートを取る素を眺めながら、神は安穩と呟いた。

「さて、それじゃあゆっくり待つとするか」

言って、神が後ろに手をやる。によっきりと言う擬音ぴったりに取り出したのは、湯飲みと草加煎餅。

「あんぐ、んぐ、んぐ、ばあんばふえひよぶあふへいひよふん。ズズ」

ぱりぱりと煎餅をかじりながら頑張れよ学生諸君と言って、神が教室を睥睨する。

寝そべった体勢故なんとも威厳に欠ける様子だが、誰もそれを気にする者はいない。

自由を満喫し、神は先程の疲れも和らいでいくのを感じていた。

「ズズ……ふう、どれ、最近の学業はどんな事してんのかな」

どこからともなく出した急須で空になった湯飲みを満たしつつ、神は今なお黒板に何事か書いている教師をみた。

ふと湧いた好奇心に溢れる様子で授業に耳を傾ける。

当然、お茶を啜りながらだが。

「えー、この公式を応用する事で、先程の問二十がより簡単になる。よし、瀬川、その場合このXには何が入る？」

何やらXやらYと言った文字が羅列している黒板を背に、生徒を指名している教師を眺め神が呟く。

「へえ、数学か……ん、ズズ」

神が納得の吐息を漏らし、湯飲みを啜ると同時に、当てられた瀬川が回答した。

「あ、はい……土偶」

「ブー！！ つえほつえほつ！？ ちょつええ！？ 歴史！？」
瀬川の回答に思わず神が茶を噴き出し、噎せた。黒板の公式を有り得ないと言う目でまじまじと見つめる。

だが、何度見てもそこに記されているのは年号も人物名もなく、英字と演算子の羅列。

「おかしい、何処にも歴史らしき部分は……」

不審そうに呟く神を背に、当然の如く尚も授業は続く。

「ん。そうだな。じゃあ桜井、YとZには何が入る？」

「……遣唐使と……」

「な、納得いかないが、やはり歴史な」

「エプロン」

「なんで!?!」

不本意ながら、百歩譲つてという神の努力は、残念ながら桜井の二の句で憐れにも砕け散った。

もう我慢の限界だとばかりに荒れ狂う心の奔流を神が開放する。

「何故だ!?! 土偶と遣唐使は良いとしよう! 何故エプロンが出てくるんだ!?! 遣唐使が付けるとでも言うのか!?! っつーか歴史と関係ねえよ!?!」

怒涛のツツコミを開始した神と重なり気味に、教師が言葉を吐いた。

「おいおい、エプロンは違うだろ？」

その言葉を聞いて、尚も叫んでいた神が尤もだと納得し、幾分か冷静さを回復する。

「そうだな、幾ら何でもそんな馬鹿な」

「やっぱり裸エプロンだろ？」

「その方がやべえよ!! お前もか!?! お前までもトチ狂ったのか教師!?! やっぱりつて何だやっぱりつて!?!」

あっさり裏切られ再び神が暴走する。

辺りにそれを聞こえる人間が居ないのが幸いなのか不幸なのかは置いておくとして、教師は更に授業を続ける。

「で、今の三つをここに代入すると、こうなつて、この二乗が分母と分子で打ち消し合い、第一次世界大戦が起きたんだ」

「何でだ！？ 明らかに時代違うし関連性皆無だろ！？ そもそも遣唐使や土偶の二乗ってどうなるんだ！？」

黒板を指差し、湯飲みをぶんぶん振り回す神の目の前で、生徒の一人が手を挙げる。

「先生！」

「ん？ どうした須田？」

「問ではY \parallel Zの場合も考えるつてありますけど？」

「ねえよ！！ 遣唐使 \parallel 裸エプロンの場合なんかこの世にはねえよ！！」

更なる異常の悪化に神はこれでもかよばかりの勢いでツッコミを入れる。

「ああ、その場合はな」

「想定しちゃった！？」

「この部分のこれと、これが \parallel で二倍になるから、第三次X大戦と言う具合に当て嵌めるんだ」

「第三次土偶大戦！？ 何その訳分かんない戦いの勃発！？」

「あ、そうそう、もし例題のようにX \parallel Zの場合には、ZYの乱が解だからな」

「裸エプロン遣唐使の乱！？ そんな乱は無い！ 遣唐使が裸エプロンで何をすると言うのだボケエ！！」

神の脳裏に一瞬ふりふりの裸エプロン姿で唐の国へと交渉へ向かう遣唐使達が浮かび。

「違う、それは違う。ありえないから！ 明らかに危ない集団になっちゃうから！！」

慌てて振り払う。

ひとしきり教師の説明が終わり、再び教師が黒板に何事か書き始めた時、神は息を切らせながら憔悴しきっていた。

「はあ、はあ、駄目だ。何と言うか、今までとはレベルが違う。今

回の意味不明具合は俺の手に余る」

がつくりと肩を落とし呟く様は、見る者の同情を引き寄せる哀愁を漂わせていた。

しかし、時とは無情なもので、誰が望もうが望むまいが否応なしに進むものである。

既に黒板には新たな公式が書き終える寸前となっていた。

「くっ！ もはや仕方ない」

キツと教師とその先にある黒板を睨み付け、神は袖をまくり、両手でほおをぴしゃりと叩いた。

「やってやるうではないか。未熟は承知なれど、曲がりなりにも神が退く訳にはいかん。全力で相手をしてやる！」

誰でさえ聞く事がない言葉になんの意味があるのか、そもそも何故無駄にツッコミを入れるのか、一見全く無価値と思えるが、神には神の考え方があるのだろう。

「さあ、来るがよい！」

気合いのこもった叫びが、教室内に木霊した。

数分後。

「……ぷしゅっつっつ」

憐れ神からは白い煙が上がっていた。

目、耳、口、頭、至る所からもくもくと立ち上る様は、あたかもオーバーヒートした機械の如く。

「無理だ、俺には無理だ」

先程の勢いは何処へやら、既に覇気は微塵も無い。

尚、授業は現在も恙無く進行中である。しかし、もはや神はどんな言葉が教室内で流れようともうもうと煙を垂れ流すのみという有様だ。

因みに、授業は現在こんな具合になっている。

「えー、つまり、先生は割とスレンダーな女性が好みで」

「むっちり系は駄目なんですか？」

「あ、いや、嫌いじゃないんだけどあーいうタイプは何と云うか、

体がもたん気がして苦手意識がな」

「じゃあじゃあオリ系は？」

「危ない方面に行きそうで怖い」

「ほほう、因みに人妻とか彼氏持ちだと燃え上がる方っすか？」

「寝とられは基本苦手。でも相手の男がろくでなしだった場合は若干燃える」

教師が答えた瞬間、何故か教室内が生温い雰囲気にもまれた。生徒達が意地の悪そうなニタニタした笑みを教師に向ける。

「へー……若干？」

「若干なんだ」

「ふーん」

まるで心の奥底まで見通すかのような視線で粘っこく見つめる生徒達。

思いもよらず、なんとも居心地のわるい状態に陥ってしまった教師が、暫くして耐え切れ無くなったのがくりと首を垂らし呟いた。「……………ごめんなさい。バックドラフトの如くなります」

諦めたかのような口調の教師を生徒達は満足そうに眺め、その内一人が喜々として口を開く。

「やっぱり、今の先生の彼女人妻だしねー」

「ねー？」

「！？ 何で知ってるの！？」

ひた隠しにしてきた秘密をあっさり暴露され、教師が目丸くして叫んだ。勿論、生徒側はそんなもの完全無視で更に話を進めていく。

「しかも、かなりヤバイ」

「マジ？ どんな感じよ？」

「F、ついでに子持ち」

「そこまで情報が！？ 何で！？ ねえ何で！？」

相手が生徒だと言う事さえ頭から抜けてしまったのか、もはや教師らしさなど微塵も感じられない態度と口調でまたも絶叫。

当然、ここで聞き入れるような聞き分けの良い者など皆無である。

「し、か、も」

「何々？」

「じゃーん」

これまで暴露を続けていた生徒がありきたりな擬音と共に懐から何かを取り出した。

「「？」」

教師、生徒共に疑問符を浮かべ、しばし停止。

彼等の視線の先に現れたのは、一枚の紙切れ。否、それは写真だった。

「よく見えねーよ、何の写真だ？」

「人が、何かしてんの？」

「ん……見づらい」

「何？ それ？」

高々と上げられた写真は細部どころか全体像まで判別がままならない。

不満が飛び交う中、写真を出した生徒はどこかのインチキ販売員めいた口調で話し出す。

「はっはっは、そう簡単に見えたらつまんない。写真は写真でもこれは、な、なんと！ 先週の休みに先生が彼女の家でふ」

「○× !?」

何かを言いかけた瞬間、教師が今までにない叫びを上げて写真を取り上げた。

「うわ、速っ」

「先生世界狙えるんじゃない？」

予想外の、ほぼ人外レベルのスピードを披露した教師に一時生徒達の視線が集中する。

しかし、教師はそんなものを意にも介さず写真を見つめていた。

「……………」

やがて、ボツと言う着火音が聞こえるような勢いで顔を真紅に染

め上げ、彼は写真を出した生徒に詰め寄る。

「なななななっ!? こ、こここれなななんで君がもてるデスカ!?」

本人は至って真剣のだが、いかんせん動揺のあまり口調が壊れているのでなんとも間抜けな様だった。

そのあまりの動揺っぷりに写真を出した生徒は意地の悪い、にんまりとした笑みで答えた。

「あはは、まだまだありますよ」

「だからにやんで!? なしてそげな恥ずかしかもんお持ちになっちゃ○ @ ÷ うきゃー!?」 興奮のあまり教師が後半グダグダで雄叫びをあげる。

見事な壊れっぷりをもう少し堪能しても構わなかったが、流石にもういいかといった様子で生徒が呟く。

「だって、俺ん家だし」

「……へ?」

静寂。

教師の顔が、さっきの発言が理解出来ないとばかりに、面白い位固まっていた。

間抜けた面で未だ呆然としている教師に、生徒が追い討ちをかける。

「先生? おーい、聞こえてますか? だからそこ、俺ん家なんすよ」

顔の前で手をひらひらさせながら言う生徒を、ぎぎぎと鈍い音を立てて教師が見、先程とは打って変わり固い口調で尋ねる。

「き、姉弟か、ナニカデスカ?」

「子です」

「誰が?」

「俺が」

「誰の?」

「先生の彼女の」

地面と水平に伸ばされたそれは、見事教師の首を捕らえた。

「全く、女性の年齢ばらそうとするなんて、何て事を。そんな先生にはちよつぷです」

「……お前、それちよつぷじゃなくね？」

「ふっ、手を開いた状態の攻撃は俺にとっては全てちよつぷなのさ。それよか学食行こうぜ、ざるそば食いたい」

足元で白目を剥きびくんびくんと痙攣を繰り返す教師を余所にそう言つと、無情にも周りの生徒達も教師を放置して同意する。

「あ、いいねざるそば」

「んじゃ俺はざるうどん〜」

「私は、あんみつかな」

「ライスボンバー」

「それじゃ米爆弾だ。おにぎりはライスボール」

「あ、そうそうそれナイス坊主」

「どんな坊主だ。しかも遠退いてるし」

こんな調子に皆口々に何か言いながら、生徒達は教室から出て行く。

最後に、あの写真を取り出した生徒が未だ伏した教師の手に何か握らせて出て行った。

まだ半分しか経っていないにも関わらず、こうして本日最後の授業は幕を閉じた。

「もう、授業じゃねえ」

教室には、呆然とした表情でそう呟く神と、痙攣する教師だけが取り残されていた。

余談だが、この教師は今回の事を問題にしていない。また、後日の彼女とのデートで彼はことごとく彼女の好みを突き、デートは大成功したそう。

この二つに因果関係があるかどうかは、未だ以って不明。そして遂に、時刻は放課後となる。

第四話 神様敗北 もういやこんなの！？（後書き）

遂に神様まで沈黙せしめる馬鹿騒ぎになってしまいました。この調子だと次はどうなるんでしょう（笑）

因みに、バックドラフトと言うのは簡単に言うと火事現場で扉等を開けた際、酸素が急激に送られ大爆発を起こすと言うものです。

第五話 神様再来 おれってすごい!? (前書き)

今回は少し長めです。描写に少し力を入れてみたらあれよあれよと膨れてしまいました。ちゃんとコメディになっているか不安で仕方ありません。あと、感想や質問などありましたらどんどん送って下さいませね。

第五話 神様再来 おれってすごい!?

黄昏れ時に辺りが染まり、教室からは人影が消えた。すっかり人気の無くなつたそこに、取り残されたように席に着いている一人分の影。

いわずもがな、棗である。

茶色から赤焼けた色に変化した机を見つめ、緊張でがちがちに固まっている様は事情を知らぬ者から見たらかなり異様な光景だろう。「ついに……」

怯え、喜色、興奮、不安。それらを熔かし混ぜ合わせたような表情で棗が呟いた。

「遂にこの時が」

「さつさと行けや」

「!?!」

唐突に、音も気配も発せず後ろに現れた何かに言葉を遮られた。

誰もいない筈の教室で、しかも真後ろからいきなり浴びせられた言葉に、棗は驚きのあまり満足に声を出す事も叶わない。

正面から見れば固まっているのがよく分かるが、生憎後ろからでは無視されていると取れるのかも知れない。現に神は気分を害したような表情になっていた。

「何だ? おい、神を無視するとは良い度胸だな」

神が言った瞬間、べしやり、と棗の首を液体と固体の中間のような物が纏わり付く感覚が襲う。

「ひっ!?!? …………… チチチチチチチチチ!!!」

しかも、熱い。

たまらず棗が首に手をやり、かけられた物を叩き落とす。

床にぶちまけられた気色悪いそれを視界に納めながら、先程までの恐怖、驚き、その前に感じていた緊張の全てを吹き飛ばし棗は後ろを振り向いて叫んだ。

「つちーな！ 何すんだよ！！」

「無視するお前が悪いのだ」

「いきなり真後ろから声がしたら誰でも固まるわ！！ ……っ、あんな今朝の！？」

目の前に居る突然現れた主が誰か判断し、棗が驚いた表情をする。

「四分の一日ぶりだの、劇的な告白は思い付いたか？」

「ラブエロス乃神！？」

「何か色々混ざってるなあおい。乃神って誰だよ。俺は縁結びの神だっつってんだろ、ああん？」

べしやり、と再び棗に半固体の何かが落とされた。今度は脳天に。

「あつつい！？ これあつつい！！」

慌ててバタバタと床に転がりのたうつ棗に、べしやり、三度投げ付けられた何か。今度は内股である。

「うわおそこけっこー敏感！ き、生地に染み込んでアチチチチチチ！？ ヤバイ焼ける熔ける爛れあっちいいいい！！」

地肌と違い拭っても中々熱さの抜けないズボンにのたうちまわり、最終的にズボンを脱いで素足を晒し、さする。

「……………露出狂」

内股を撫で、息を吹き掛けている棗に神がぼそりと言つと、反射的に棗が言い返す。

「違っわ！ お前のせいだろ！？ 神様の癖にこんなことでへそ曲げるなよ！！」

「神様だろうが何だろうがム力つくもんはム力つくわい」

偉そうに言つて、神が腕組みしながら胸を反る。姿だけは神々しいのだが、そんなものは見た目だけだと、棗が神から視線を逸らし脳内でぼやく。

途端。

「あっちいいいい！！！！」

後ろから背中に例の物を入れられ、棗が再び悶絶した。

ごろごろと転がり回りながら、棗は服を脱ぎ捨て纏わり付く物体

を必死に掻き落とす。

「何だよ俺何も言っていないだろ！」

パンツ一丁で神に吠える棗。

茜色の教室であられもない姿で叫ぶ棗を見て、神が一言。

「……………変態。いくら好きな女から告白されるからって調子乗りすぎだろ」

「だからお前のせいじゃん!? 明らかにさっきのは俺に非は無いだろ！」

「いや、なんか失礼な事考えてる気がしてな。神罰だ」

「気がした程度であんな仕打ちすんのかよあんたは!！」

実際失礼な事を考えていた事を棚に上げ、棗が怒鳴るが、神に動じる様子は一切見られない。

棗がその様子を見て更に苛立ち、怒鳴ろうとするが。

「まあ、そう頭に血をやるな。ほれ」

声を出そうとした瞬間に神が軽い調子で言っただけで、つい止まってしまった。

「な、なんだよ」

いきなりの意味不明な行動に棗が神の掌を見て怪訝そうにしている。

「むっ」

若干力の籠った声を神が出す。途端、神の掌が虹色に輝き、そして、棗の目の前に上から何か巨大な物が、轟音と共に降って来た。

「うわ!?! な、なんだ?」

棗の前に現れたのは、人一人楽に入れる位の大タライ。しかも中には白く濁った液体が半分ほど満たされている。

「……………これ、何?」

困惑をあらわに棗が尋ねると、神が馬鹿にしたような見下す視線で棗を見た。

「何だ、タライも知らんのか。いいか、これは」

「そうじゃなくて! なんでタライ? しかもなんか入ってるし」

強引に神の言葉を打ち切ると、神はああ、と納得したように話出す。

「いや、熱かろうと思ってな、冷水を用意してやった。なに、せめてもの詫びだ。ちゃんと出たら乾かしてやるから、そのまま入って冷やすが良い」

さっきまでの傍若無人ぶりから急にしおらしくなった神に、つかの間、棗が間の抜けた顔を晒すが、すぐに疑いの視線を向けた。

「あ、怪しいな。だいたい何だよこの水。濁ってんじゃん」

「知らんだろうから教えておいてやろう。神が力を注いだ水はな、祖なる白に染まるのだ。また、神が力を注いだ物は神恵と呼ばれ、大変貴重でありがたいものなんだぞ」

妙に説得力のある説明を受け、棗に疑ったことへの罪悪感が湧く。相手が曲がりなりにも神を名乗っている事で、どこか無意識に退いているからかも知れない。

「ま、まあ、そー言う事なら……」

故に、割と素直に納得した棗は恐る恐るタライの水に足を浸け、異常が無いと分かるとゆっくり体を沈めていく。

「お、おー。すげえ、程よい水加減。流石神って言うだけはあるな、絶妙な気持ち良さだ」

水に浸かった棗が表情を緩めると、それまでじっと見ていた神が何気ない口調で話し出した。

「因みに」

「？」

人差し指を立てて言う様は、どこか楽しげに映る。

突然の変化に棗が何だと顔を向け。

「今お前が入ってるのはただの飽和状態の砂糖水だからありがたくも何ともないぞ」

「騙したなー!!」

勢いよくタライから飛び出した。

「う、うわ、顔洗っちゃったよ俺!？」

棗がしまったとばかりに口元に手を当てると、不意に口に水滴が染み込む。

「あ、甘っ!! 俺甘っ!!」

一体どれほどの砂糖が溶けているというのか。軽く眩暈を起こしながら棗が恨めしげに神を睨んだ。

「何だよこれ!! 尤もらしい嘘良いやがって!!」

吠える棗に神は意地の悪い笑みで返す。

「嘘など言っておらんさ、さっきのは全て事実だ。よく思い出してみろ。俺はその水が神恵とは一言も言っていないぞ?」

「ぐ……へ、屁理屈だ。理不尽だ。何だよ畜生、俺が何したっつんだよ」

棗が悔しそうに言う。

返ってきたのは、意外な言葉だった。

「おかげで緊張が解けたろ?」

「……は?」

笑いながら言っ、神はずぶ濡れの棗に手を向けると、パチリと指を鳴らした。

「お、おお!?!」

神の動作と同時に、棗の足元から柔らかな風流が渦を巻くように棗を包む。風は瞬く間に棗の纏う水気を払い、同時にどんな原理なのか、渴いた部分には脱ぎ捨てた筈の服が瞬間的に現れ覆って行く。「す、凄え、勝手に服が出て来る。」

まるで絵の具で塗り潰すように現れ、自身を包んでいく様子に、棗はただただ感心するばかりだ。

「ふむ、これでよいな」

僅か十数秒で、棗は元の状態に戻っていた。

「うわ、マジで?」

手足を交互に確認し、棗が感嘆の声を漏らすと、神がようやくと言った感じで口を開く。

「これで大分余裕ができたろ。お前、ただでさえ変な癖があると言

つていたじゃないか。それであんなにガチガチに固まってたんじゃどうなるか。火を見るより明らかだろうに」

子供に言い聞かせるような口ぶりで諭す神に、理解は出来るが納得いかないとはかりに棗が愚痴る。

「だからって、あんな事しなくてもいいだろ。マジですっげー熱かつたんだからなあれ」

「それくらいしないと頭が切り替わらんだろう?」

「にしてもやり過ぎだ! 大体何だよあれ。べちよっとして無茶苦茶熱くて、あれも神恵ってやつか?」

体にかけられた事を思い出しているのか、苦々しい顔で尋ねる棗を満足そうに見ながら神が口を開く。

「ああ、あれか? あれは……」

「……あれは?」

「ふっふっふ」

何とも不気味に笑うだけで中々言い出さない神に棗の不安が徐々に膨らんでいく。

「な、何だよ。そんなやばいもんなのか?」

「ニヤリ」

一瞬、神の両目がギラリと光つたのを棗は見逃さなかった。というより、見逃せるレベルのものではなかった。

びくりと棗が身を強張らせる。

「ま、まさか、呪いとかかかるんじゃないだろうな!? なあ言えよ!」

「何なんだよあれ!」

「とっ」

棗が近付いて来ると、神は緊張感の無い掛け声と共に背中から取り出した何かを投げ付けた。

「のうっ!?!」

軽く手首だけで投げられたように見えた円盤状のそれは、弾丸のような速さで棗の眉間に食い込む。棗の顔は、あたかも目線を入れたようになってしまった。

「い、いきなり何するかな君は……」

謎の円盤物を眉間に食い込ませ、ゆっくりと後ろに倒れながら棗が震える声で抗議する。

「いや、なんか目がやばかったから。煎餅でも食わせて落ち着かせようかと」

神が言い終えると同時に、棗が仰向けで床に倒れた。

「へ、へえ、そりやどうも。だが、だがしかした。ここまで良い一撃にする必要はあるのか？ ……俺は軽く瀕死だ」

未だ顔に煎餅を生やしながらかくかくと痙攣する腕を神の方へ向け棗が呻くように言う。

対して、神が気まずそうに僅かに顔を逸らし、頬を搔きながら返した。

「や、その、あ……すまん。本当なら面の部分を当てるつもりだったんだが、手が滑った」

気まずそうにしていた神は、取り繕うように笑いながら言葉を続ける。

「ま、気にすんな。意外と面白いぞ、その顔」

神がそう言つて棗の顔を指差した。同時に、棗がまるでバネでも仕込んでいたかのように勢いよく跳ね起きる。

「面白いじゃねーよ！！ 痛いつつんだよ前見えねつつんだよ気にしないわけがねえつつんだよ！！」

拳を握り全力で叫ぶ棗。

「……おい、俺はこつちだぞー？」

悲しいかな、目が煎餅で塞がっている為に棗は神のいる場所とはてんで検討違いの方向を向いている。

「……」

「……」

気まずい沈黙。

数秒の硬直の後、棗はクルリと神の声がした方向に向き直った。

「大体なんで俺がこんな目に合わなきゃなんねーんだ！」

まるであさつての方向を見ていた事実など無かったかのように、神が居ると見られる場所をびしっと指差し怒鳴る。

「なあ、どう頑張ってもさっきの無かった事にするのは無理だと思っぞ」

神の一言に、再び若干の間が生まれ。

「やつぱり？」

「うん」

いやに素直なやり取りが交わされた。

「……や、それでもやる子だよ俺は！！ やってられっか畜生が！！ 言え、さあ言え、あの熱いブツはなんだ！！ 言わないとぶん殴るぞおおっ！？」

「やかましい」

テンションを無理矢理引き上げた棗が最後に奇妙な声を上げた。理由は簡単、神が台詞と同時に悲惨な程刺さっていた煎餅を引き抜いたからだ。

「ったく、落ち着きの無い奴だ。さっきからお前の目の前にあるだろっが」

目の辺りに真横に走る赤い跡をつけた棗がその言葉に辺りを見回す。

だが、当然それらしい物は見られない。

「っーかさつきからって言ってもさつきから俺の目の前にあったのはその茶色い煎餅だけだっつんだよ！！」

再び神をびしっと指差す棗。

「……」

ぼとり、と棗の言葉を聞くや否や神が手に持っていた煎餅を床に落とした。

「あ、あれ？ そんな、物落とす位ショックな事だったか？」

「……」

僅かに動揺を見せる棗を捨て置き、神は再びごそごそと背後から何かを取り出した。

「あー……何故に今湯呑みと急須をだすのかな？」

棗の疑問など微塵も相手にせず、神は湯呑みをこぼこぼと急須から出る液体で満たしていく。

「無視か、ここまで来ての無視か。ふ、ふん。そうやってごまかすつもりだろうがそうは」

軽く涙ぐんだ棗が意気込んでいる最中に、今まで棗を完全無視していた神が掌を内側にちよいちよいと動かし、棗にこっちに来いの動作をする。

「ん？ なんだよ。遂に諦めて白状するか？」

期待半分、不思議半分で近付いてきた棗に差し出されたのは、淡い緑色の液体で満たされた湯呑み。

「え、何？ くれんの？ ありが」

棗が手を出した瞬間、不意に湯呑みが揺らいだ。

傾いた湯呑みから湯気の立つ液体が床に流れ落ちていく。

「あ、な、何すんだよ！」

「お前に飲ませる物など無い」

「わざわざ呼んどいて酷過ぎるだろそれ!？」

ツツコミを入れる棗を神は既に見ていない。神の視線は床に流された液体に向けられていた。

「……はあ、勿体ない」

何とも悲しげに呟く神。

「捨てたのお前じゃん!？ 勿体ないなら捨てんなよ!! っつか

俺にくれよお茶!!」

「イヤダ」

「即答!？」

シヨックを受ける棗に、神が人差し指を下に向けた。

「こ、今度は何だよ」

ゆっくり棗が視線を下げると、そこには零された液体に濡れた煎餅が。

「そこまで俺に飲ましたく無かったんかお前は!？ 煎餅に飲まし

た方がマシだつて、の、か？

興奮する棗の顔を驚愕が覆う。

棗の視線の先には、湯気を上げる濡れた煎餅。いや、煎餅、だつたもの。

「何！？　ねえ何コレ！？　何でお茶かけた煎餅がこんな急に熔けるの！？　おかしいだろ絶対！！」

「ニヤリ」

不意にワラツた神が、ズルズルの軟物となつた煎餅を指に一掬いし、ぎゃあぎゃあ喚く棗にひゅつと投げる。

「え？」

短い言葉を上げた棗の目に、それは直撃。

「ぬゅまし！！」

「いや、有り得ないからその叫び」

目を押さえて背を反らせながら棗が唸る。

「こ、この熱さは……そうか、これがあの謎の熱軟物体の正体か……」

「やっと気付いたか」

「ああ、この熱さは間違いない。そうか、これが　　って納得出来るかボケエ！！」

言葉の途中で棗が目を擦りながら叫ぶ。

「おかしいだろ！？　熱すぎるとかふやけ過ぎとか以前に！　何て言うかもつ全体的におかしいだろ！？」

「お前が存在する事の方がおかしい」

神が冷淡に吐き捨てる。

「神様に存在否定された！？」

「冗談だ」

「性質悪いよその冗談！」

「それにしても、お前よく平気だな」

唐突に、神が感心するような素振りを見せた。

「あ？　ああ、あんだけ何度もくらえばそりゃ多少は慣れるさ」

苦々しい表情で答える棗を見て、神がきよとんとした顔で棗を見る。

「いや、何その顔？」

「お前、ある意味奇跡的な奴だな」

「えー、と？ だから、何の事ですよ？」

「これ」

神が差し出したのは、先程の湯呑み。

「これ……て、さっきの湯呑みじゃん」

「問題は中身だ中身」

言われてじつと湯呑みの中を覗き込むが、あるのは僅かに残っている淡い緑色の液体だけ。

「お茶、じゃねえの？」

「いや、お湯溶きワサビ」

ぎざぎざ、と錆び付いた機械のような擬音で顔を上げ、神に目を移す棗。

「……マジで？」

「マジで」

人間とは不思議なもので、思い込み次第で信じられ無い事が出来たりもする。とは言え。

「騙したなあああああおおおつがだつしゃああああ!!!!!!」

事実が分かれば、それはたやすく崩れ去るものでもあるのだった。

「目が、目が焼けるうおおあああああ!!!!!!」

言葉通り目から火を噴きながら棗が右往左往するのを呆れ半分で神が見つめる。

「お前さあ、今更だろ？ 何で気付かないかな」

腕を組んで呟くが、生憎棗はパニック状態で聞く耳を持つ暇が無いようだ。

「ひーっひーっふー！ ひーっひーっふー！」

「なしてラマーズ法？ なんか産むんかお前」

「ばいんっ！」

「パイン！？ 果物だぞあれ！！」

「あつたあま！！」

「……もしかして、コレ全部悲鳴か？ うわ、紛らわしく。有り得ね」

「もげたっ！！」

「頭もげちゃった」

意味不明な悲鳴を上げる棗を眺め、たまにツッコミ又は相槌を入れる事数分。棗が落ち着きを取り戻した頃合いを見て神が口を開く。

「そろそろ元に戻っ」

「ベテイそれあつたあま！！」

「てないな。うん。確実にパニックってる」

「もげた！！」

「ベテイさんとやらも頭もげちゃった」

「やれやれと神がため息を付く。

「はあ、はあ、や、やっとおさまった」

どうしたものかと考えていた神の前で、ようやく棗が落ち着きを取り戻した。

「おっ、やっに戻ったか。長かったなあ」

「て、てめえ……！！」

鬼気迫る形相で棗が神に詰め寄るが、神の方はどこ吹く風である。

「あーはいはい、苦情は後で受け付けてやらん事も無い事も無きにしもあらずだつたら良いな？」

「俺に聞くな！！」

普通ならこのままボケ倒す所なのだが、今回は少し違うらしい。

のんびんだらりとしていた神の空気が突然場違いな程引き締まる。

「ふう、いじり もとい、ガス抜きはこの程度でよかる。とつとと始めるぞ」

「知るかよ！！ こっちはテメエに一言言ってやんなきゃ気が済まねえ！！」

「んな事してる時間ねえよ。これから告白なんだろうが」

ばつさり切り捨てるその一言に、棗がはつとした表情に変わり、時計を見た。

「うおお！？ やつべ、え？ あれ？」

どうしてこんな大切な事を失念していたのかと、後悔と焦燥に駆られ教室に掛けてある時計に目をやった棗を彩ったのは、困惑。まるで何かの間違いだと言わん限りに、今度は携帯電話を開き時間を確かめる。

しかしそれは、棗の困惑を深めるだけとなった。

「ど、どうゆう事だよ。時間が、止まってる！？」

驚愕に顔を染めて、棗は窓から外を見る。

そこから見た景色は、まるで写真のようだった。

雲も、風も、鳥も人もなにもかも、全てが動く事を忘れてしまったかのように停止している。

現実を否定するかのように、かたかたと表情を驚愕に固めたまま震える棗に、神が可哀相なものを見るような目をしながら話し掛けた。

「お前なあ、幾ら何でもあれだけやってたら日が落ちてるだろ」

「いや、でも、だって……て言うか、これもあんたの仕業だったのか？」

何を当たり前な事をとばかりに、神がため息をつく。

「まあな、あんまりガチガチだったから解すのに時間掛かるかもって思ったのと、もう一つ大事な用事があつたからな」

言って、神が何やら妙に手をワキワキとせわしなく開閉させる。

半端な笑顔でするものだから、棗などは今度は何だとはかりになり怯えていた。

「だ、大事な用事ってのは、俺関係？」

出来れば杞憂であって欲しいとばかりに淡い期待を込めて問うが、「当たり前だろう」

見事に爆散した。

「な、何をする気だよ」

時間を止める等と出鱈目な真似をする神に逃げ腰全開で棗が尋ねる。

「お前が大事な場面で雑念が入って失言するの、何とかしてやるっつったろ?」

「あ、ああ。そう言えばそんな事言ってたような」

曖昧な調子で頷く棗。

いまいち腰の引けている棗の前に、神が語った。

「とりあえず詳しく言ってもお前じゃ理解出来ないだろうから、簡単に言っぞ。よく聞けよ」

ワキワキと艶かしく動かしていた手を止め、神が真顔になる。

「お、おう」

幾らふざけようが、腐っても神。真剣になった時の場の空気は、神気漂う荘厳な雰囲気にならりと変わる。

空気に当てられたのか、急に緊張の糸が張ってしまった棗は自然と溜まった唾液をゴクリと飲み込み。

「俺と一つになるぞ」

「っ　!?　げほっ!!　えほっ!?!」

思い切り、噎せた。

「何で!?　何でそうなるのさ!?!　まさかそんな趣味が!?!　お、

俺には心に決めた人がおおう!?!」

「気色悪いわ」

胸元を隠す形で左右の腕を掴み後退った棗の額に、神のチョップが炸裂する。

「い、痛ひ」

頭を押さえうずくまった棗を仁王立ちで見下して神が説明を続けた。

「今からお前の頭に入る。ま、思考に干渉したりする感じだ」

「??」

「とりあえず、やってみりゃ分かる」

頭に疑問符を浮かべいまひとつ理解しきれない様子で棗に向

け、神がゆつくりと掌を差し出した。

「……軸固定。脳内結合解析。転移遮蔽透過。仮想投影消去、実干涉開始………」

神が呟き出してから、白や赤の光る糸のような物が神の足元から立ち上り、ゆらゆらと幻想的な雰囲気を醸し出しながら揺れていた。徐々に光は強くなり、反対に神の姿は薄らいで行くように見える。現実と言うには余りに神々しく、背筋が凍る程の優美さに棗が見とれていると、不意に、どこか遠くを見ている様子だった神が視線を交わして来た。

「!?!」

あまりの迫力に、まるで心臓が鷲掴みされたように、思わず息が止まる。

「いいか、行くぞ」

短い言葉の後、神の周りが一際輝き出した。

文字通り息つく事も忘れ見入っていた棗が思わず目をつぶる。

次に棗が目を開けた時、そこには誰もおらず。ただ、時計の秒針の音だけが、やけに棗の耳には響いて聞こえた。

第五話 神様再来 おれってすごい!? (後書き)

栗君が哀れで仕方ありません。因みに次も哀れです。書いてて調子に乗ってしまいました。まあ、彼なら大丈夫でしょう……多分？

第六話 神様合一 俺もしかして危ない人!?(前書き)

いよいよ佳境がせまってまいりました。

第六話 神様合一 俺もしかして危ない人！？

「つ、遂に来てしまった」

階段を上がりきり、屋上と階下とを隔てる扉を前にして、棗が呟いた。

階段を上がるにつれ心臓は鼓動を早め、握った掌には汗が滲む。

「……」

ゴクリと、自分の唾を飲む音がやけに棗の耳に残った。

本当に大丈夫なのだろうか、そう棗の脳裏を一抹の不安が過ぎる。

(余り気をやるな。任せておけ)

前触れ無く、棗の脳内で聞き覚えのある声が響いた。先程まで教室で共に騒いでいた相方こと、縁結びの神である。

「……あ、ああ」

どうにも脳内に直接語りかけられるのは変な気分だと微妙な表情を取る棗。

この奇妙な感覚を初めて味わったのは今から数分前、神が消えた時に遡る。

棗が目を開けると、教室には誰もおらず、時間も普通に流れていた。暫くぼうつと神が居た筈の場所を見るが、神がいた痕跡は無い。自分の体を見回しても、何処にも異常は見られない。

無機質な音を毎秒規則的に発する針がきっかり半周して、棗は先程の事は白昼夢ではと思いついて始めた。緊張の余り意識が落ち、在りもしない幻影を見ていたのではと。

改めて考えてみれば、放課後になってから起こった出来事は自分にとって都合が良い事ばかりでは無かつただろうかと、棗はこれまでを反芻する。緊張を解され、時間は止められ、しかも告白を失敗しないように神様直々に助けしてくれると言うのではないか。余りに都合が良過ぎる。

だが、棗は失念していた。もしかしたら余りに悲惨な過去なので、

頭が無かった事にしたいのかもしれない。熱々の蕩けた煎餅に散々体を焼かれたり、砂糖水の風呂に入れられたり、煎餅を目線代わりにされたりしたにも関わらず、これらの出来事は彼の脳内から完璧に抜け落ちていたのだ。

もし覚えていたならば、多少は自分に都合の良い妄想説を疑ったかもしれない。まあ、それでも数々の不思議現象を現実として捉えられたかどうかは定かでは無いが。

「そうだよなあ、そんな事ある訳ないよなあ。何馬鹿な夢見てんだろ」

棗がやれやれとため息を付く。

「……そろそろ、屋上行かないと」

力の余り入っていない口ぶりで棗が呟いた。

笹野からの告白がどうでもいい訳では決して無い。無いのだが、拭えない不安に有り得ない白昼夢を見た今では、どうにも気分が下降するのを止められ無い。

「俺、どうなるんだろ」

何となく下に視線をさ迷わせながら、棗が教室から出るべくドアに手をかけた。

幾ら気分が乗らないからと言っても、行かないなど出来る訳も無く、棗は疲れた様子でドアを開ける。

（たたりらりん。棗はレベルアップした）

「しねえよ！？　なんだドア開けてレベルアップて！？」

（ポケが一上がった。ツッコミが五上がった。冷静さが十下がった。男気が百下がった。理性が消え失せた。つーかお前が存在する意味がわからねえ）

「殆ど下がってる！？　しかも最後の何！？　意味がって、なんで自分に存在の意味とか言われなきゃならんだ！？」

ドアを開けた瞬間、棗の頭におかしな考えが浮かんだ。考えてもいなかった事が急に頭に響くように広がったのだ。しかも人事のよう。

まるで頭に誰か自分とは別の意志が語りかけてくる感覚に、思わず棗は一人にいるにも関わらずツッコミを入れていた。

(お、ナイスツッコミ)

「だからなんでこんな事が浮かぶんだよおおお!? 一人でしかも自分の頭にツッコミ入れてるなんて」

(かなり危ない奴だな)

「言われなくても分かってるよ!」

(本当に分かってる奴はここで言い返したりせず黙るものだと思うが?)

「うっ……」

頭に浮かぶ言葉に思わず唸り、その通りに押し黙る棗。

棗自身は一言も発しないのだが、生憎頭に響く言葉に止まる気配は見られない。

(何と云うか、鈍い鈍いとは思っていたが、此処まで来ると逆に清々しいな。よくそんな事で今まで生きて来れたものだ。あれか? 絶滅危惧種かなんかで誰かの保護下にあつたとか? ま、こんな小汚い餓鬼を保護する物好きはそうそういないだろうな)

自分自身にけなされるのは果たしてどんな気分なのか、棗の落ち込みようは凄まじいものだった。床に両手両膝をついてさめざめと泣いているのだ。せめてものプライドなのか、声を殺しているのが本気で凹んでいるのを余計に強調させる。

(泣くな汚い)

「汚 汚いつてなんだよ!? 慰めるなり何なり、百歩譲って引くとしても汚いは無いだろ汚いは!」

あまりの暴言について棗が視線を上げて爆発した。とは言え、周りから見れば一人で勝手に盛り上がっているだけに見えるし、脳内の第三者も怯む様子は無いが。

(汚物を垂れ流す様を他にどう表現しろ?)

「やめてその表現!? 何か漏らしたみたいだから!」

(ただ漏れじゃないか)

「ある意味正しいけど、けどね!？」

(あーはいはい、時間無いからネタばらすぞー。今お前は俺を自分の思考と思ってるみたいだが、俺は縁結びの神だ)

「……へ?」

いきなり浮かんできた言葉に棗が間抜け声で答えた。自分で自分が信じられ無いという言葉を初めて理解した感じである。

(簡単に言えばお前の思考に干渉してんだよ。今は表面上のものに留めてあるが、やろうと思えばお前の意思決定、吐き出す言葉なんかに干渉出来るぞ)

説明口調でつらつらと現状を語る神に、棗はぼかんと、それこそ頭を真っ白にしてしまう。

折角妄想と言う事で片付けたのに、原因たる存在が再び現れた。

しかも、相手は文字通り自分の頭の中にいて、自分の考えにも干渉出来ると言う。事態の受け入れる以前に頭が付いていかないのも無理の無い話だ。

「お、俺、病院いくべきかな? 外科? それとも頭の内側だから内科? 耳から覗いたら見えるのか? はっ! もしや今レントゲン撮ったら俺巨大ロボット状態? でも格好いい以前に頭に人入ってたら正直ヤバイよな。頭に小人さんが住んでるんです? ……止めるところ洒落にならない」

混乱の極致に達したのか、的外れもいい所の戯れ事をぶつぶつと呟く棗。頭を抱えてする様子はまさに正気を失っている風体だ。

(落ち着け…… つつても無理か。むむ、仕方ないな)

加速的に興奮していく棗に対し、何やら神はするらしい。あたかも苦渋の決断のような言葉とは裏腹に、神は随分楽しそうな口ぶりと言った。恐らく姿が見えたなら、意地の悪そうな顔で笑っているに違いない。

(ふふふ、これは仕方ない事なのだよ。そう、断腸の思いって奴だ) 最後に建前丸出して笑いながら宣うと、神は少しの間口を閉ざす。急に頭から気配が消えた神に棗が気付き、ん? と気をやった、

まさにその瞬間。

(わーーーーー!!!!!!)

「!?!」

棗の頭を粉々に吹き飛ばしても有り余る音量が彼の中を駆け巡った。

物理的なものではないので鼓膜が破れるといった外傷が出来る心配は無いが、鼓膜が破れた方がまだマシだったかもしれない。耳から入って来る音量では無いので避ける事叶わず、狂音はいつまでも彼の中で好き勝手に暴れ回るのだ。

神が叫び続ける事、たつぷり十秒。

たかが十秒と思うかもしれないが、棗にとってはまるで永遠に続く拷問のように感じられ、彼の思考の全てを塵も残さず消し飛ばした。

(さて、これだけやれば混乱から醒めたる。おい、とりあえずさっさと行くぞ)

「ぶしゅううう……」

命令口調で言う神に帰ってきたのは、棗の気の抜けた残骸のように発せられた音。白目を剥き、口からは魂のようなものが、もひゅーと言う効果音を出してゆらゆらと上がって行く。

(……ちと、やり過ぎたか?　　あ、りや、頭ん中本当にからっぽになっってしまった)

どこをどう確認しているのかは分からないが、棗の思考が飛んでいる事を知った神がしまったなという雰囲気を出す。

棗と言えば、口から立ち上る魂らしきものが静止し、何事か喋りだしたではないか。軽いホラーである。

「お、お代官様……あゝれ」

(いつの間にか魂が着物姿で帯引つ張られてクルクルしとる……)

尤も、端から見れば馬鹿丸出しの緊張感ゼロどころかマイナスではあるが。

流石の神も突然の魂の暴走にやや驚いたようで、興味深げにして

いた。

(思考が飛んだっつーか、なんっつーか、面白いにも程があるだろ)
「おにぎりジャステイス!!」

(誰に向けてのメツセージだよ。親指立てても格好良さ微塵も無いし、歯を光らせるな鬱陶しい……と、そろそろ向かわせるか、あっちも屋上に着いたみたいだしな)

どうやら神は相手の笹野の方にも何かしらの手を打っているようで、彼女の行動を把握しているらしい。

言っや否や、神は瞬時に棗の表層意識とは別の、記憶領域へと潜って行った。

そして再び戻って来た神は、実に何気ない様子で話し出す。

(もう遊ぶのはこのくらいにしてさっさと屋上に行くぞー。今すぐ正気に戻らないと……)

ここまでは、棗を戻すには余りにも至らず、未だ魂は好き勝手に暴走するだけだった。

聞く耳など一切持たない様子で、くねくねと踊っている魂に、神が掘り起こしてきた爆弾が遂に投下される。

(三年前友人との賭に負けた罰ゲームでじ　　)
「今戻りました!! ええもう完全に!! 完璧に!!」

神が言いかけた瞬間に、魂は不意に伸ばされた棗の腕にそれこそ残像が残る勢いで口内に押し込まれた。また、魂が戻ったと同時に棗が脳内の言葉を掻き消すかのように叫び待ったをかけたのだ。

(よし、行くぞ)

「イエッサー!!」
びしりと敬礼をして教室を出た棗の中で、神がぼそりと呟く。

(女装した揚句教い　　)
「駄目……!!!!!!」

その後、何回か暴露を目論む神を牽制しつつ、ようやく棗は屋上前の扉まで辿り着いたのだった。

「……………」

思い出して、自分の不憫さに思わず口元を押さえて噤り泣く棗。
(はいはい、これから告白される奴が泣いてどうする。それより、返事は考えて来たんだろっな?)

涙の原因はさらりと流し、棗に問う。

「う？ ま、まあ一応」

歯切れが悪いながらも、先程まで泣いていたとは思えない位にこちらもあっさり返した。どうにも引きずらない性格の二人である。

(よし、ゴー!!)

「いや、ゴーって。もう少し待ってくれよ」

(……なして?)

「あのなあ、こっちも緊張してんのやばいの爆発しそうな」

心底不思議そうな神に棗が心臓の位置を手で押さえながらまくし立てる。やはり意識が向いてしまうとどうにも緊張に身が固まるらしい。

(心配すんな、ちゃんとフォローしてやるから。待たせたら悪いだろうが)

「う、で、でもだな……」

待たせたら悪い、の部分に反応を見せるも、あと一歩押しが足りない。神もそれを感じ取ったようで、続けてトドメとばかりに言い放つ。

(情けない、んな事では嫌われても知らんからな)

好きな相手から嫌われると言う文句は、特に思春期真っ盛りの年代において多大な影響力を持つ。現に棗も、その例に漏れず一気にやる気を見せた。

「よ、よし。行くぞ」

単純な奴だと、僅かに苦笑しながら、神は棗に何も言わず静観していた。

カチャリと、古くも新しくもない手応えと音を響かせ、扉が開く。視界いっぱい広がる赤焼けた風景に始め気を取られるも、次第に棗の目はその一点、朱光を背に佇む少女へと視線が吸い寄せられ

る。

笹野柚子が、そこに居た。

「き、来てくれてありがとう。東雲君」

恥ずかし気に言われた感謝の意に、柚子に見惚れていた棗は一際心臓を跳ね上げる。

互いに顔に朱を差し、ただ、時が流れるままに身を任す。

今ここに、最後の舞台が幕を上げた。

第六話 神様合一 俺もしかして危ない人！？（後書き）

いやはや、長かったですねえここまで。

第七話 神様会議 返事って大事だよね!! (前書き)

遂に一番書きたかったネタに行き着く事ができました。ここまで長かったです。

第七話 神様会議 返事って大事だよね！！

「わ、私と付き合って下さい！」
辺りに響く告白の言葉。

屋上に着き、暫し見つめ合っていた二人だったが、はつとした表情をして柚子はそう叫んで頭を下げたのだった。

片思いの相手からの告白を、夢にまで待ち望んだその言葉を、一体誰が断ると言うのだろうか。

だが、棗からは瞬時に反応は得られなかった。

緊張か、はたまた間を取っているだけなのか、彼は沈黙を通す。

端から見れば余裕に見えなくも無い様子だが、実際、彼の脳内は今まさに未曾有の状況に陥っていた。

ここからは、場面を一転し神へと移ろう。

神は現在、棗の癖の実情を知るため、彼の脳内に居た。

とは言っても、物理的ではない。棗の思考を一つの世界として架空の空間を創り出したのである。脳内会議を視覚化したと考えれば分かりやすいかも知れない。

神の居る場所は一面の闇に覆われ、しかし何故か周りは見渡せる不思議な空間だった。硝子張りの部屋に暗幕を張り付け、蛍光灯を点けた感じだろうか。

神はそこに腕を組みながらただ立っていた。

不意に、神の前方三カ所に下から上に向かい光が伸びる。逆三角形を描く形で上がった直径一メートル程の三つの白光は、緩やかに収まり再び闇へと沈むと、不思議な事にそこに新たなものを創り出していた。

神の右斜め前方には、純白の羽根を生やしたもの。左斜め前方には、漆黒の羽根を生やしたもの。すぐ前には、どちらも生やしていないもの。

どちらも生やしていないものの真上には、電光掲示板のような横

に長いデジタル画面が浮かんでいる。

だが、彼等を見た者はまずそんな事に疑問は湧かないだろう。何故なら、彼等にはそれよりも目に付く特徴があるのだから。

彼等は、同じ容姿をしているのだ。

皆一様に、学生服姿の、棗。

「よし、準備は出来たな」

現れた三人を見て、神は満足そうに頷いた。

神の前に現れたのは、それぞれを善意、悪意、許可と言う。これらは人間の言動に関わる三要素である。

善意、悪意が提案を出し、議論した内容に許可が判断を下した時、人はその行動に至るのだ。

つまり、ここに干渉する事は棗の言動に干渉する事に等しい。

「さて、許可にしか干渉は出来ないが、上手くフォローしてやるか」
基本、神はフォローはしても意思そのものに干渉は出来ないようになっている。

今回の場合は、導き出された言動を許可するかしないかには干渉出来るが、どんな言動を導くかには干渉出来ないという訳だ。

そんな神の呟きを契機としてか、前方の会議が開始された。

まずは許可が軽い口ぶりで話し出す。

「んじゃ、これから返事考えよか」

「「おー」」

「……小学生かお前等」

真剣とはあまりに掛け離れたやり取りを見て、ぼそりと呟きを漏らす神だが、生憎三人には届いていないらしい。

「最初は善意！　なんて答えるよ？」

「俺は、」

「こつちこそ、俺と付き合っして下さい」かな？」

びしりと指差された善意が顎に手を当てて答える。

「ふむふむ、じゃ次悪意！」

「パンツ見せる」

「悪意っぽい事言い出した!？」

悪意が即答した瞬間、神が思わず叫ぶ。

対して、許可に動揺は見られない。

「悪意は相変わらずだなあ。こんな大事な場面で言える訳無いじゃん」

「ちっ」

あっさりとは否定した許可に、神もほつと胸を撫で下ろす。

「だ、だよな。なんだ、許可の奴ちゃんと仕事してるじゃないか」

「と言う訳で、混ぜてみよう!！」

「わー」

「……え？」

突然、元気良く笑みを浮かべながら右の拳を上げて許可が言い出した。

善意と悪意は無表情で凹凸の無い口ぶりをしながら手を叩いている。

嫌な汗が背に流れるのを感じた神が、錆びた鉄のような音を立てて首を許可の方へ向けた。

「……ま、混ぜる？」

神の言葉とほぼ同じタイミングで許可が口を開く。

「さて、それでは皆の集、準備は良いかな？」

「おー」

「では、イツスロットタイム!！」

棒読みな二人の反応の後、満面の笑みでパチンと指を鳴らす許可するとどうだろうか、なんと許可の上に浮かぶ掲示板に様々な文章らしきものが上から下へと物凄い勢いで流れ始めたではないか。

「……ここだ!！」

許可がいつの間にか手に持っていたボタンをもう一方の手で勢い良く叩くと、掲示板に流れる文章がぴたりと止まった。

全員の視線を集める先に写し出された一行の文。その内容は、『パンツと付き合ってる』

「はあああ!?!」

神、絶叫。

「よしつ、じゃあこれで決まっ

」

「決めるなー!?!?!?!」

小気味よい音を立てて許可の頭が勢い良く叩かれた。

いきなりの衝撃に許可が不機嫌を露わにして振り返る。

「つてえなあ、誰だよ?」

「誰だよじゃねんだよお前何してんだよ好きな相手に告白された返答がパンツと付き合っ」とけてどんだけ鬼畜野郎だよお前は!?!」

こちらを向いた許可の襟首を両手で掴みながら前後にぶんぶんと物凄い剣幕で揺らす神に、許可はかなり気圧されながらも反論する。

「いや、刺激的でおもしろ

」

「刺激どころか致命傷だボケがあああ!! 良いからさっさとやり直さんかい!!」

「ひっ!?! あ、あいあいさー!!」

怒気どころか殺気を帯びてきた神に、許可が全身汗だくになりながら服従の意を示し敬礼を返す事で、ようやく神は手を放した。

神の修羅さながらの形相に涙目になっていた許可が善意達の方に向き直る。

「…………ごほんっ」

恥ずかしそうにわざとらしい咳ばらいをすると、許可は先程の一件などまるで無かったかのように調子を戻した。

「気を取り直して、善意は何て答える?」

「え? そ、そうだなあ、

「俺も好きです!」とか

神と許可の様子に呆気にとられていた善意が復活して答える。

「じゃ、悪意」

「身の程を知れ豚」

「悪意酷いな!?!」

あまりの暴言に神がまたも驚きの悲鳴を上げた。

「よ、よし。じゃあ、行くぜスロットタイム!!」

「「いえー」」

幾分か緊張の滲む許可に対し、またも棒読みで返す善意と悪意。

「おらあ!」

力強い掛け声と共にボタンが押され、再び掲示板に一文が映る。

「選ばれたのはこれだ!」

「今度は大じよう」 自信ありげに掲示板を背に言う許可を見て、神が安堵の言葉を吐きながら掲示板を見上げた。

『俺も豚です!!』

「ぶじゃねえよ! 何だ俺も豚って!? お前以外に豚宣言した奴なんかいいえよ馬鹿!!」

「よし! これなら問題無いな!! ゴー!!」

「NO!!」

腕を組んで満足そうに頷く許可に再び振り下ろされた神の鉄槌。

「ええ!? また駄目なの!？」

「何を以ってこれが良いと踏んだんだよお前は!？」

「……」

「……」

「ブー」

「たわけっ!」

僅かな沈黙の後、真顔のままやたら低音で呟いた許可の頭を神が叩く。

「ノリで許可してるんじゃない! 真面目にやれ真面目に!!」

「真面目に……ブー!」

「百八回殺すぞてめえ」

「すみませんでした!!」

変に力をいれた許可の豚の鳴き真似に神がどす黒い笑みを浮かべて呟いた途端、許可の額が地に擦りつけられた。

所謂土下座の体制のままガクガクと震える許可に神の冷やかな視線が突き刺さる。

「……で？」

「やり直させて頂きます！！」

「よろしい」

「ははー！！」

土下座姿勢のまま遜った物言いをしていた許可が神のその一言でがばりと起き上がった。

「へへへ、旦那。これからが本番ですぜ」

「ほう？」

卑屈にへつらい小悪党風に笑う許可に神は疑惑に満ちた視線を向け、否、突き刺す。

全身が神の視線に寒さを通り越して痛覚が悲鳴を上げんとする中、許可が振り切るように言い放った。

「ふははは！ あっしはまだ実力の十割しか出しちゃあいなくてすぜ！！」

「全力じゃん」

「あ、え？ いや、あれえ？」

視線が和らぐものとはかり思っていた許可が激しく困惑する。

「お、おかしいな。ここは十倍になるのを驚く所なんだけど……うーん？」

決定的な間違いに気付く事が出来ずに悩む許可が、神に白旗を上げんと声をかける。

「あの、つかぬ事を」

「レイズ、二枚上乘せ」

「乗った」

「上等、乗ってやらあ」

許可が振り向くと、先程までの位置から既に神は消えていた。

映ったのは、しゃがみながらカードをする三人の姿。

「俺放置なの！？」

待遇にシヨックを受ける許可だが、生憎相手をしてくれる奇特な人物は居ないようだ。

「コール、フォーカード。悪いな」

悪意が見せた手札には、同じ数の刻まれたカードが四枚揃っていた。犬歯を剥き出しにした笑顔でチップを寄せる悪意。

不意に、善意が朗らかに笑いながら手札を晒し待ったをかけた。

「こつちはロイヤルストレートフラッシュなんだけど」

「何イ!？」

「詰めが甘いね」

言つて、善意が悪意からチップをゆつくり奪つてゆく。

「何だこのハイレベルな役は……」

許可が呆然と呟き、まだ札を開けていない神に目を向けた。

そこには、肩を僅かに震わせる神の姿。

「くくく、甘いわガキ共が」

ゆつくりと手札を開く神の笑みに、許可を含める三人に動揺が駆け抜ける。口を開いたのは善意。

「ま、まさか、ロイヤルストレートフラッシュより上なんて……」

たじろぐ善意を尻目に、遂にカードの内容が皆の目の届く範囲へ入れられた。神は勝ち誇りながら役を口にする。

「五光」

「花札!？」

許可が有り得ないとばかりに叫んだ。

五枚のカードには、それぞれ色彩豊かな絵が描かれている。

「ちよつ、おかしいでしょそれ!？ 何で一人だけ花札なの!？」

許可が盛大にツツコミ、神の左右にいる白黒コンビに同意を求めようとするが、

「ちつ、まじかよ」

「なかなかやるね」

二人は悔しそうにしながらチップを神に渡しているではないか。

「納得しちゃうの君達!？ ポーカーでしょこれ!？」

「「あ」」

詰め寄る許可を見て、カードをしていた面々から揃って平淡な声

が上がった。

「んだよ、許可居たのかよ」

「さつきから居たっつーか居なくなっただのは寧ろあんただ!!」

「ぜんっぜん！ 気付かなかったよなあ」

「……君、善意だよな？ 善良な意思と書いて善意なんだよね!？」

「お前ら何と話してんだよ？ さつさと続きすんぞ」

「悪意に至っては存在すら認めていない!？」

三者三様に悲鳴に似たやり取りを交わす許可を見て、神がやれやれと二度手を叩いた。

「はい、それじゃあ会議に戻るぞー」

「うーす」

既にカードを回収した神がそう一声かけると、悪意と善意はもう元の位置へと帰っていた。

「俺って、俺って一体……」

残されたのは、膝を抱え込みぶつぶつと自身の存在意義を問いている許可と、面倒臭そうにその様子を半目で眺めている神の二人。

「どうせ、どうせ俺は……」

「ああ、全く面倒な。ほら、さつさと戻るぞ」

どうにも終わる様子が見られない許可の肩に手をやり神が告げると、許可は神の方に目もくれず置かれた手を払った。

ほのかな明かりしか無い空間に乾いた音が響くと同時に、許可が勢い良く立ち上がり神に向かって自棄気味に怒鳴る。

「ほつといてくれ！ どうせ俺なんかぼまああ!？」

喚き立てる許可が自虐的な言葉を吐こうとした瞬間、尋常でない衝撃が許可を襲った。

何の事は無い、神が許可の腹部を素晴らしい勢いで殴り付けたのだ。

「あ、あんたは鬼か」

「黙れ。今のお前の無情な行為に我が心がどれだけ傷付いたか」

膝を付き悶絶しながら抗議する許可に神は片手を額に当て、さも

嘆かわしいと言わんばかりに首を振る。

「先程の愚行に受けた衝撃は、数値に換算すれば実に一ヌルコビツチは容易に達するだろう」

「何その単位!? め、ヌルコ……?」

聞き覚えの無い単語に過敏な反応を示した許可を見て、神がああ、と何かに気付いたように補足を入れた。

「ヌルコビツチとはな、隣に住んでいたヌルコビツチさんが実は人では無くチヨークの粉だったと言う事実を知った時に受けた衝撃を基準にしている」

「尋常じゃないにも程があるだろうそれ!? あんたの目はどうなってるんだ!!」

「道理で話し掛ける度に小さくなる訳だ」

過去を思い返しといるのかしみじみと目をつぶる神を、許可がそれはそうだろうなと半眼で見つめていた。

「おい、二人共。いい加減始めようよ」

ある程度話が落ち着いたら頃を見計らってか、善意が元の位置から手を口に沿える形をとりながら二人を呼ぶ。

「そだな。幾ら時間の流れが違うつつつてもいい加減何かを返さないとそろそろヤバイか」

「何かうまく流された気がするけど……まあ、いいか」

やれやれと頭を掻きながら戻る神に、腕組みをしてぶちぶちと文句を言う許可が続く。

ようやく定位に皆が揃った所で、再び会議は仕切り直された。

第七話 神様会議 返事って大事だよね!! (後書き)

最後と思いきや、実はまだ続いてしまいました。皆さん暴れすぎですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6536e/>

縁結び狂騒曲

2010年10月8日13時58分発行